# 會稽三浦與合　壹

へ13
3114
1

# 會稽三浦譽

全六冊

文政三庚辰歲初春新鐫

へ13
3114
1-6

東京都千代田区神田神保町一番地
大屋書房

別
特別書物

會稽井

## 叙

三浦の大助が名を問遥儀光口號ハ東西分の男子光
志秋と桃原京時ハ只軸蜓の異名なるく傳人ハ忠
重ハ忠臣義公孫行狀を初めとして亦ハ今迄
十代義明景時が事跡ハ趣向の種なりて婦女ハ
知ざるハ重宏盛長なんどハ源家再興の基礎なれ
狂て詩語孤寓言を交へ原来文法ハ孫呉ハ
唐文中の真あるハ爲ハ故舞妓操り弦歌を寫し
ハ重宏ハ爲ハ人妓義ハ代ハ
滑稽雷雨形容ハ

門 へ13
號 3114
1

義明孫娘玉房

梶原平三景時

梶原

六郎太夫娘梢

従二位右大将頼朝公

傾城濡衣

實者八丁礫喜平次後家

三浦大介義明

乳母於犬

真田文蔵國安

# 會稽三浦譽目次


巻之壹　七騎落　爲帽子打ノ　長生年賀　施行書
巻之貳　神笠名陣　山路の夢　軍物語　空起請
巻之叁　虛實海　軍用金　帷子辻　眼水晶
巻之四　星合寺　うり足　石切梶原
巻之五　奥見櫓　物ぐるい　名残の酒宴　曦小袖
巻之六　老の波代　枯木の花　草紙かくし　源家榮


會稽三浦譽巻之壹

浪速　濱松氏助　著

高木よそ

## 七騎落

西雄立ん〻で立支なと古人の判宜ふ武注昔平治元年臘月中旬左典厩源義朝ら固ん〻ふ郁芳陽明待賢門へ押寄〻平家方の小松三位重盛をはじめ頼盛教盛ふまさかく大軍無二無三ふ攻ふとゆ〻ども重て用意の備へ猛く勝負を見へざるふ所ふ右ヱ門ノ督信頼ら膳病未練の行ふ所ふ捨て落ふ〻しう〻平家ハ大きふ無勢にして吐きさいんて責入給ふ武方ハ勢萌きふ散乱して一門主従所〻へ落ふ左馬頭義朝等鎌田兵衛政家清〻も尾張國野間の内海ふおいて長田

庄司忠致がたゝよ聚まりて生害ふおこなひ嫡子惡源太義平が
石山の辺ふ忍びくを渡尾太郎義康がさゞ出して討捕次男中
宮進朝長ハ龍華越の落足勝の口と筈ぶるふ射ゝ手義朝
青墓の長がりとふて自害なと実武士の身の行末こそ浅猿
けまこゝふ三男兵衛佐頼朝ハ此乱軍のうちふ辺ふ小平といふ
所へ落延しかと孫平兵衛宗清ふ生捕き惜うゝね命をすゞ入ゝ
うち清盛公ハ母ゝ池禅尼軽朝を偶と御覧あつて清盛ゝ
天死あ臣家盛とのゝふ面貌よく似たるを尼ゝうう助命の
願ひ頻ゝふして一門の人ゝも遠ゝ背なるがゝく一院の御所へ其ゝはしを
奏聞ふおゝひ評義一決して伊豆国蛭ふ小島へ流罪とゝて伊東入
道祥心ふあつけゝきけふ勢ふ所伊東入道ハ軽朝の相貌と仏



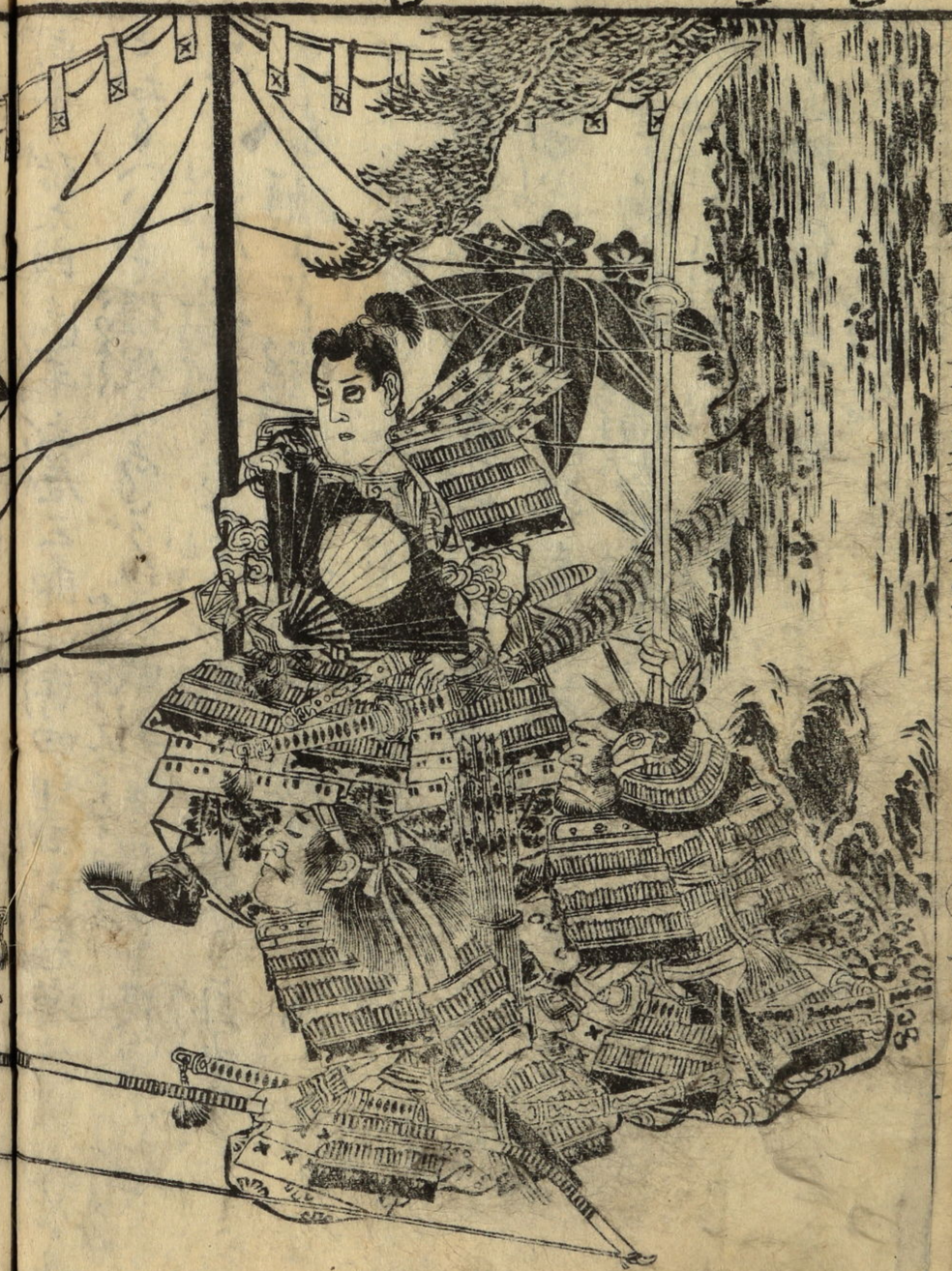
鉢見て後年ふ至つたなバ一天下を掌握なし平家ハ彼と相成へく
ふゝ棄ハ時ふ斬ゝん人ハ斧をいるゝ我ハ悔あるとゝ容ふ害し奉らんと
せしゝバ原来名智の軽朝ハ早くも入道が心底を悟ゝ同国ハ
条四郎時政の館ふつゝるゝ都て此あいゝ二十餘年の憂と
月を送ゝるゝ時なるゝ治承四年の冬ゝ高雄の文覚上人平
家延討の院宣を乞得て軽朝ふ伝ハ院の下し文ふいゝく
あるゝの年ゝゝと以来平家者を発免政道ハ憚ゝく
佛法をゝ軽朝家を乱さんとゝ然まゝ神明の冥助ふ任せ
かつふ勅諚の旨趣を守ゝゝく平家をゝゝべし
院宣如件
治承四年十一月二十六日

左近衛中将藤原光義承
前右兵衛佐頼朝へ

かゝる院宣を下し給ふうへハ龍の昇天するのいきをほ得たる
小同國ハ牧判官を討亡し先鍾倉小根を堅くし蒲生冠者範頼
與孫秀衡が館小在る九郎冠者義経二人の弟を追手搦手の両
大将に定めて都小登せ平家を一時小攻うつぶ居なゝ四海を
掌ん支吾掌よおやへたゝとして日なゝ義兵生起して牧判官
を夜軍小討取かと石橋山の合戦小打負主後七騎真鶴が崎小
道を来しが大将軍朝ゝ作せ出さるやう吾いやくも院宣と称し
且ハ亡父義朝の仇を報ん恨を平家小謝ん為ハさら義兵
を起ヒ北条四郎時政ハ内縁小連まゝ左もあらべ土肥次郎

同じく弥太郎遠平土屋三郎同宗四郎田代冠者信連吾
とおりへハこそ催促小ゝ牧判官重高を夜軍小討ちとと
いへとも土肥の椙山小おいて大場眉野小攻崩さ臥木の天河小隠
まゝ生部おゝ梶原平三景時吾を見逃しかゝゝの小抱小よつて
支ゆ名れく是迄小落ぬ大場眉野小大軍小て殊更ハ地理
の案内小よく則たゝハ山ゝ小て退来らん小必定なるいでいざ御
あゝ田代冠者ゝこゝいでさん彼此度君の御義兵小組ゝ葉ハ
いつまも御先祖ハ幡太郎殿ゝ代く源氏の御家人なれハ
御大支を見届ぬ者候べき漢や漢の高祖小栄陽の囲を出タモ
ゝ時ハ僅小二十八騎小成しかゝも終小項羽の百万騎小手脚て天下
をたりちゝ二且の勝負と必ゝも御心小かゝべゝと昨日土肥の椙山

會稽三浦誓



容北誓

ふて卧木の谷ふ隠まゐらせを梶原平三景時ごゝ見付たてまつる
御運其場ふ極まりを不思議ふたとけ参らせ御ふ氏神の御
たすけとやうく平三景時大場眼野ふ組とるとのへとも心を味方ふ
傾けゝと存ぜられ夏ふ成て御在家草をうちて尋ねまゐ候
はゞ先くあつく此所ふ御座をかまへ梶原が音信を聞しかるべ
ふべう存じ奉ふとぞやけり北条四郎時政これを制して信連が
評義さるふ夏なゞく時政梶原が心裏を推量ふかそも此度の
合戦ハ清盛入道ふ仇を報ぜふ仕厳の義兵ふて梶原が
ふあるべ其身源氏の譜代なれども往古平治のみだまふ左兵衛
義朝うたまゐし是非なく平家ふ随ふ忠大場が陣ふあるべ
いへども源氏の運を考へ平家ふ勝ふ其侭ふ奉公ふまつる源氏



ふ勝ふ此度の恩義をいたて身をたてん為ふて卧木のうちを見
通し君を助けまゐらせと思へハ今更大場ふ引ふ源氏の味方
ふハ成ともを却て手強く迫来らん此所に長居ハ思ふ外ふ似
たり君ふ一先駿河の方へ御身をかくしひき
別き三浦千葉上総の館へ趣き味方ふかくし軍勢を集め
不日の参會無ふへしと聞もあへを土肥の実平北条どの、同一理を
あるといへとも今ハつふふ主従七騎ふ打なされ鷲破といちく吾一ふ
真先ふけ討死せんと一命をたてまつるべきふ人ハなし有ハ左あまハ
君困窮ハ御先途を見捨吾御使ふ参らんと余人ハ思ふ実平
親子ハ得ものを土屋三郎宗遠ハ道ふおくれ此場ふ在合
ハ待受て尋ねらるゝや但ハ座中の年ふきゝ北条とのこそ御使

ふハ相應せとゝ云ふ濂てあひ誰ふ[illegible]もとりて者ふ臣時改らつゝ
めいゝひ人ゝ其詞ハ大なる僻事なりと御辺さもの高名も討死も
京家ゝ軍勢馳ぐるゝ合戦わゝん時の支一人の雑兵業武者
たるとも味方ふあつゝ入ふゝて今日の忠義郎まれはして三浦の一黨平
葉の勇士を味方ふ招く御使尋常ゝぬ一大支ふして腰板役ゝ
簡れちゝひ所詮此ゝ人ハ命二つ持たゝむ人一つの命ハ君ゝ随ひ一つの命を
此御使とゝて忠義を励まきよと向て実平點然たゝ臣ゝ備ハ世粹
孫太郎と此御使ふ立よとの謎ゝなゝと推量ゝ岡嵜とのゝ此頃迄ハ
真田子市義貞とゝ命の懸ゝ人を持ゝと敵を防ぎ吾君を落
く奉らむため石橋山ふ残ゝとゝ由ゝて い御ゝ生死の安否を知ゝゝ此
屋ふ命二つ持たる者ハ斯ゝ実平だゝるゝ時改ゝの御指配面

白ゝいゝふ世粹孫太郎此義心得たるゝと有けるハ進退ゝもゝ
の命子細ゝと頭ふ頂掌ふ[illegible]ける

○ 烏帽子折

真鶴ゝ時乃拜義互の問答時ゝ臣ゝ四ゝふ土屋三郎宗遠おゝれ
たゝぶかけ来ゝて御前ゝるゝふ畏ゝ君會稽の恥を雪んと云ふ
立義兵の門出歓ふ攻ゝ是烏帽子を捨て大ゝゝふて行ゝと
世の人口言情く存ゝゝるべき烏帽子尚人と尋出ゝ召具ゝ
御警をあけのゝ去ゝゝ大将軍ゝ見奉ゝ敵ゝ[illegible]
いつゝも同恐ふ居なゝて人ゝ召ゝ烏帽子尚人
けきたゝと参て出来ゝ年ゝ二十ふ七歳ゝ
子のまゝ引ゝゝふく負たゝふ

の名目数品あるを右眉左眉を眉小諸眉三長帽子平礼烏帽子折烏帽子立烏帽子細烏帽子折烏帽子などと何まで

まことにそ述ふけふ北条時政うあへふ途中なるを八田

の程ハ知らねとも右折の烏帽子老頭只今こゝふて折立ハさ

んや所望なりしと有けるそハいや安紀御支なるを七頭おろ

千頭ふても時の間ふ折てまわらせんと侍折合せて持参せり頼

じて烏帽子折の御祝儀ふハ白雉子のはたいみ御三寸ばかりも

今日ハ宿りとをいつる時られなふ幼き者雉子の首を打おとしを

なるを持合せをるべ去なるを爰ハ所ら山路の露のをてを頼祖の

遊ひ七百歳を経しも心を汲得し谷の水峯の松風ちゝんくと吹音

いまをさつくの琴の色太平ふと関めをらまを心源の流を汲

滝の水常ふをたを万歳楽あるを自出度やとそ寿

取あけ見たをべ是ハいふふ大伏比れ松をあらうふ雉子ふ

あを色左折烏帽子立たるを残をの烏帽子と見はした

ををハいつまを右折尋常なるを備ハ天然と軟朝ふ左折

ハ門出はしと心れ悦ひ穂ふあるをを是見をかをく今落人となるを

新朝ふ左折をあるをハ吾先祖八幡太郎義家の例ふうるひて

軍の勝利うたるひか目出度しくと宣へ七騎の面々ものと頭をさ

け女ふ最前おとふ紀ふ雉子の首を折をといひも平氏と亡を天の

告かをこと吉左右あるハをたをいざ悦ひの出陣と各席を立はを

女鶯妃今去いをくと上ふひき臣備く源氏ふ御大将軍朝ふ公ふく

渡らをあるを冥加ふかるひる古文ふ侍ふ恐をなをら吾くハ故た

典厩義朝公ハ宮住なしたる子八丁礫喜平次と申者の妻子ハて
さふらふ処喜平次支ハ平治の乱まへ以前ハ不慮ハ故殿の御勘
気と家と甲斐国ハ蟄居いたし武士止めて二君ハ仕へを大太郎
と申烏帽子折ハ零落して憂年月を送ひしが夫も五とせ以前ハ
相果ぬと記念の此大三郎を召具し女の手業ハ烏帽子折を
性命今日はうゝび君の御用を承ふ支まゝしも天道の御恵ニ存
さふらふハ何とぞ幼年の大三郎ハめんゝらを亡夫喜平次が勘氣の
侘義重ハ願ひたてまつる昔ハ御おとゝ主後となる参らせなは
雅なくとも戦場の御供させ溝堀の埋草ハも命を君ハたてまつ
らハ陰地の爺が修羅の苦しを助ふ道理御慈悲と存ぜ
いつまでも偏ハ御執成をたのゝ入御情御顔と親も子もひまを伏まうし
ねうひけ子佐殿ハ言を聞ふたまひ我知ふらぬ時耳ハらぬたまひ
八丁礫喜平次が妻子ハて在けるを今日不思議ハかゝる命を
此縁浅ハ〳〵さふ越ぞ去ふゝ武士ハてうけなる故殿の不忠を
今烏帽子折の身ハ救されるとも本意ハ〳〵ぬ何とそ也
如く武士ハ立かつるべき思ふ也四ぬ何ハまる也彰朝の軍役ハ立
支あゝ其時こそ以前のおとく主従なるふそと組くとも也
土肥弥太郎遠平ハ東八ヶ國の勢ハ〳〵浮嶋ハ原ハて合戦
ふゝ御淀とうけ土肥遠平ハ三浦千葉上総の錯へと心ざし八丁礫の
妻子ハ人〳〵小禮をのゝて己ハ住家へ立帰と佐殿主後七騎の
真鶴が嵩と退きて暫〳〵世ハ忍ひ者

## ○ 長生年賀

二説桓武天皇の苗裔高望王より十一代王氏と出て遠くハ
源氏譜代の勇士三浦大助義明ハ一門九十三騎小枝葉ハ
幾屬の尊敬小泉報いにきのくなくひ稀代の長寿を保ち朝ごの
弦仕もふゆゝ沢吳竹ハ重梅有明なんどいふ嫁孫嫁ゆ
の手ふうあさせび脇吳そらく褥ちく出引膳たき労くるを賀盛
とやもふ白書院へ立のでゝ家打そろひなゞ對面せんと有あれバ唱く
と参て子息三浦別當義澄まゐるせ物ふハ鳩の杖吾身もい海た
父母の涼く杖の年を経て家とつく杖竹の子代親ふ者ら成長余ハ家
の教ん今と目出度けき次ハ大田三郎義成佐原十郎義連親の誓
をかうふ者てお年ないもいつまでも若紫のかうろく引巾綿子一重
ハ薄けきど御息ハあつく暖うふお肌さうもふくく犬の皮錦の裏うわ

小蒲団ふ寒氣と防き暑を掃ふ扇子ふのせて持たるふハ若者の
遺風と慕ふ和田太郎義盛義澄ら惣領ふて大助が為ふ三浦を
伺ふと狗のたゝ諺ふり目ゝ孝の者臺の物ハ弟次郎義持其外
甥姪聟舅後帝ゝこの未ゝ迄おもひくの棒もの松竹ふすせ鶴
亀ふ寄ふ廣間の長椽つゝひ跡ふさうつて畠山次郎重忠義盛
ら妹大助の孫聟ふ縁を結ふの常陸帯かこゆうゆ〜くひへくも重忠
が所存を此帯ふ准らゝ老躰の御身に添ひ御力ふあふ情ての寸志
を易たひ祝延の嘉義ふ一同ふ拜列ふ千秋樂とそ祝ひふ
大助機嫌よけふ打わ、笑ふ子ふも孫ふも聟たち嫁たち祖父母
目を今年もかりひ祝ひ吳ふ段満足せると柳半百とやらを今年
いへふ五十の賀ハ岡崎四郎ふ嫁ら也惣領娘のおつもとと祝ひ

耳順といふ六十の賀ハうまこなる別當義澄古来稀なりといふ七十の賀ハ大田三郎義成者老と呼ふ八十の賀ハ佐原十郎義連杖とつく白年といふ九十の賀ハ孫なる義盛百歳の賀ハ弟の次郎義持生もいきるを百〻とうへハ九十三騎の一門うちつゞき毎年〻新のおとく誕生日を祝ひくるもいと六年浦嶋ゞ八千歳ハ其身沐の長生ゆゑ子孫の洲汰ハ閑及ひ此義明ハ今年まて条鉞おほへを煎薬の味知〻ぞ供息災嫁孫繁昌賀よ甥よと九十三人東国小大名多〻と以ても吾ハ續く果報者也皆〻あやうて長生せよいざゝ西せん女房ども家の惣領おつちを呼よと有けるハ小ゆる紀取ゆゑおつちさはゆハ叶ハざるゆ用支あつて今日の御祝義ハ得まゐらぬと其竹さはハ重梅さはゆ有明さはゆも同〻ふゆ細こと宜〻うゆ上られよとの御お

とゆるふて仮と取絡へハ大助ハ不審うゆ何支ハ寄らぬ人一番ハ駆来る女ゆ例年の祝義と剛て得まゐ〻ぬとあるいうゆとの用支なるゆ後家身て指配ゆべき支も有はゆ又岡嵜四郎も来〻ゆ真田与市も越ゆ早く子細を尋ハ遠ゆべと老人の心を苛つも道理なゆ別當義澄父ゆ前ハにゆゆ寄つて横嫌ゆうかひ夜前姉人ゆの文到来仕り候へゆも今日の御祝義ゆ納めて其後御耳ハ入ゆ差ひ〻書面の趣きハ流人兵衛佐殿院宣ゆ家ゆ平家追討の御義ゆ思召立ゆまつ軍の支始免ハ牧判官義高ゆ梁田冠者ゆ御金ハようて岡嵜親子御召ハようて参上の留主を預ひ〻他出相成難きゆ叶ざゆ用支ハ此支ゆ申ゆゆ仕て扶おつゆゆ脊骨もなしゆと續けうち各おゆゆと立騒き行ゆ

老体の行歩をあやふく労いとけつと義澄杖のすがりとし遠寄る親の
杖のようふを歎き伯父の古くへを思い出て我身の語りを顧ふ小
恩ひあたらぶ御心小脊ぶく限こを仰ぎ下さんし稲此うえの御
慈悲なるとと思き入てぞやけふ大助ハ居尺高小ふりちのまこ六十小足
をふんぬて人小智恵を借へ紀年小ふあらぶ是不とのを文を弁へさふ佐
殿義兵を上たまりて蛭ヶ小島と三浦のさうひ千里万里も隔たるほ
ど不とのの企風説ゆも聞ざる文の有へきう聞ど八聞ぬ小して云らせん
親ヶ祝義ハ内澄文ふれども姉おつちうこうるの知らせの書状其面
をるせ多ゆも耳へハいまこざらかぶゆ数代相傳の御主人の御義兵を知
らぶして安閑と此城中小日を送りて人こ小先を越さまこ今迄たるかまぬ
三浦の家の鉾さ紀を小まこ小せハ目小見へざらふう盲人めとてたさ

打うつけめとて八十と打二男義成堪ふて押隔て恐をなぶう父上小も
御温ひをや此度佐殿の御義兵の小を世集ひ人こハ日頃所所へ参
上いと勇て御企を存せ此条時政を初め土肥次郎実平同苗弥次
郎遠平土屋三郎田代冠者信連ふん〻蔵ふ父上小も佐殿を数
代相傳の御主人とて左程まで小大切小思ふ召きふハ勇こ御見参も
あつて御企の人数小何ゆ多小入ゆつどゆ是迄小問音信の御沙汰も
なく今更の御やとんき八恐きなぶう御温ひをと存ぶたてまつると言
せも累ぶまつると白眼借ふ打そろひをふうつけ者東八ヶ国小そは
立たふ弓取の中小も平家の目角小立ふ大助流人無法佐と
の存まを蛭ヶ小嶋へ親ふく参りあやゆ其は叔六波羅へ聞へ入今
まて軽相ふをよも安穏小ておぶきう此方ふを向音信を取さふは

三浦大助義明
太田三郎義成
三浦別當義澄
義明が義心賀楚義澄をうつ

大切なるあるを大助が心底を佐殿へも弓矢神八幡
に御照覧あるべしあくまでも如何願ひて大助が渇望と何う渇
サアそこ退かと杖を開き弟も一くるめ打ふくハ親叔うつハ祖父
義盛兄弟重忠もやぐめうねふ紀昌竹有明八重梅豆小目くを
氣をつけて皆く吾身を西浦ひとと兄弟の手ところくふわうく奥へと
伴ひゆく

## ○ 施行書

老年なぐ三浦大助八岩を作るの強き氣の武士なるハ義盛来き
分もなくとき佐殿の御義兵を聞き駆ちハ是非もなく最早暫時
の猶豫も不忠の上塗と腰拔の親叔父甥ふかなどとも汝兄弟馬
を飛ばせかけつもと軍兵八跡より追ひかけ付とせん合点と喜く

よと老人の氣を苛ちて下知うとと斬へ桃次の行脚出来朝公なるの
御使として土肥弥太郎遠平との御出なさしめと聞なれと遠方
通せ義持立て使者を請ひ賀意の用意せよと吾身も袴をすぐ
おつと礼義正しく待請まハ朝の御使者土肥弥太郎遠平と思
ひもよらぬ大助が娘のお玉とうハ義盛重忠おとくを使者八制て
騒がまるを嫁ゐ姑はなると娘もひねて祖母とつたまい女も男はは
記物をひ腰小梓の弓を張身小年の矢を負ふ朝の行使
土肥弥太郎遠平と武士よかるとも娘のお玉とかたぶて
母とも思ひぞ義盛と重忠とのもあを不在ふ器と得
ふく使者と没けの座小つけハ岡嵩ゐ母真田ゐ祖母伊石ゐ三
大助ゐ惣領娘とりのく先公今日の御説義世上小親

多くとゝ共百六歳の今年まで無病ふて長壽ほめ奥州
稀なる祝詞ふて日ろこぶ悦びいろ〳〵と半分いとせどもしおこ
内證の咄〳〵ハ跡ての夏今貝軒朝公ゟの御使ふあるゞやゞ越
邑御口上の一通ゟ委さふ問ゟべ〳〵なぜ其樣ふいつ迄もあゞ〳〵
ないと何らまてうまく御使者の役目を早ゟまたるといふふ
夏ふや近年ハめつきりと物忘まさ敢ゟと問て年老ていハ直ら
ざるゆゝ若紀うちふ養生こそ大夏ゟきと八十ちゝ紀娘ゟも
いつも若ひと詠やふ子ふハ目のゟ紀親心傍て吹出さゞるゟなゟ
お上ハ威義を結ひて土肥弥太郎遠平どのふ替ゟて今日此城
中へ參邑軒朝公ゟの使者の趣きよく問きよとゝふふ皆〳〵頭
をさけ耳をそば立問居たふ流人無沸依殿院宣を孫ゟゟ平家

追討の為義兵を起させふにゟて三浦の一黨味方ふ軍ゟ恵
ゟ召ふ〳〵御使別ふ口上ふなく則おゝ〳〵ハ施行書の一通拜見ふ頭
掌あるふよいそく奥ふ各姓名を記〳〵ゟ人との御支なゟと差出ゟ
御使者御大義老人ゟしハ白衣の侍御免あれと手を結んてかゝ手
水施行書取て押いゝて紀逐一ふ讀おゝゟ思ひ涙をゝ〳〵と
流〳〵誠や吉の中ハおゞゝふ縄のおゝと故典厩義朝公待賢門の
夜軍やふきて尾張国まで落のひゝひ野間の内海ふおゝて長田
がためふあへなくも生害まゝ〳〵ゟ公達ゟ或ハ討ゟ或ハ搦ふなゝせ
ゝと問し時ハ口惜やよゝかゝふ長生〳〵て主君の裏ゟ見ふふ
浅猿やゝ無人家ゟと世の中ふ飽果〳〵我命もなゞ〳〵ゟ此御
小頭ふ悦ひゝ弓矢の冥加ふ叶ひゝゝ家の誉身ゟ面目何支ゟ見ふ

然ん平家世をとつて二十余年非分の官位に任せ過分の俸祿
思ひのまゝ惡事を積て狼籍日を重ね滅亡既に極まる源
氏の繁昌時を得たり嬉しかる三浦の一門九十三人大助かくと申さん
小遠將に及ぶ者一人も候まじと拠名代小大助が名を記し傾学
の證に備へ参らんと悦び勇むべきなり記

藏書

高木與會藏書

會稽三浦與言卷之壹終

たの家
本郷真砂町
紙屋國屋
十四番

春秋物性吉郎
壹百目
會稽三浦の譽
港座

會稽三浦與言